

EXPEDITION

IV

1989～1998

2000年11月

横浜市立大学探検部

オーストラリア大陸横断自転車行

佐々木 仁（一九八八年入学）

私は、大学4年のとき（1991年）に1年間休学し、自転車で旅をした。まず、5月の終わりから8月の上旬にかけて、東北の太平洋側から北海道をほぼ海沿いに一周した。その後、北海道より戻ってから準備とアルバイトをして、10月の終わりにオーストラリアに渡り、約4ヶ月をかけ横断した。この文章は、そのうち、オーストラリアの横断についてのものである。

（いざ、オーストラリアへ）

オーストラリアはどんな国かと聞かれたら、「まず風の国、次にハエの国、そして最後に広い広い国。」と答える。

1991年10月23日、私はオーストラリアへ向けて旅立った。そもそも、大学に入学して探検部の扉を叩いたのは、高校の時に、自転車でオーストラリアを縦断した人の手記を読んだのがきっかけだった。その手記に触発され、自分も大学時代にしかできない何かおもしろいことをしてみたいと漠然と思い、その可能性のある探検部に入部したのだった。あれから4年近く、いわば自分の出発点を再確認するような旅である。

が、正直に言うと、希望に満ちあふれた前途洋々たる気持ちばかりではなかった。前日まで、心の中はむしろ不安で一杯だった。海外にまったくの一人で行くのはこれがはじめて。英

話もほとんど話せない。もちろん海外サイクリングもはじめて。未知の地に一人で行くことのほかに、自転車は無事オーストラリアに運ぶことができるだろうかといったことから、メカのこと、道のこと、気候のこと、現地で調達するもの、無人の地帯で自転車が壊れたらどうしようかといったことまで、考え出すといっそのこと投げ出してしまいたいと思うことも度々だった。

出発の何日か前に部のみんなが壮行会を開いてくれた。前日の夜には吉見と児玉が電話をくれた。何気ないことではあるけど本当にうれしかった。そして当日の朝には三浦と小森がわざわざ見送りに来てくれた。心細く感じていたときだけに、みんなの存在のありがたみをつくづく感じた。

久しぶりの成田。荷物をカウンターに預けるときに、10kgオーバーで5千円の追加料金を取られる。そしてとうとう出国。三浦に見送られて出国カウンターへ向かった。もうあと半年は帰ってこないのかと思うと、感慨もひとしおであった。出国手続きを済まして搭乗ゲートに向かう途中、大学1年の夏、初めての海外（フィリピンの民族探検）の時に先輩の佐藤さんから言われた言葉、「おい、もうここは日本であって日本じゃないんだぞ。」というのを思い出した。

途中、クアラルンプールで2泊後、10月25日オーストラリア、パースへ到着。空港から外に出ると、良く晴れていて、生暖かい風が吹いていた。風に乗ってハエが1匹僕の顔に止まった。これが、忘れもしないオーストラリアとの最初の《遭遇》だった。

（パースで）

パースに着いてから走り始める11月7日までの間、これから半年間旅するオーストラリアに慣れるため、また情報収集と準備を兼ねて2週間ほどパースに滞在した。パースでは、チャイナタウンの近くにあるノースブリッジ・ユースホステルに滞在した。ここには当時、ワーキングホリデーの人をはじめ、バイクで旅している人など、日本人が多く泊まっていた。そのため、まだ来たばかりで右も左もわからぬ中、一人で心細さを感じることもなく、いろいろと話したり教えてもらったりでき、とても楽しい時を過ごせた。よく異国の地で日本人だけで群れることの是非を言われることがあるが、自分はまだあまり気にしなかった。英語ができないため、日本人以外の人との会話に入りたくとも入れなかったということもあるが、それよりもむしろ、直前に北海道を自転車で回って旅先でいろいろな人と接していたこともあって、たとえ外国で会う日本人同士だとしても、違いはその場所が北海道か異国の地かというだけで、旅先で出会う人ということに変わりはないからだ。

パースに着いて驚いたことがいくつもあった。たとえば町中では、まず老若男女を問わずサンダラスをかけて歩いていた。また、多くの若者たちは靴を履かず裸足で歩いていた。裸足の意味は分からないが、サンダラスはすぐにわかった。地中海性気候であるパースの10月は、風は冷たいが日差しはとても強いのである。自分も1週間としないうちに、町中を歩いていただけで、日に焼けて顔の皮がぼろぼろと剥け始めるほどだった。ここではサンダラスと帽子は必需品だったのだ。そのほかに驚いたことはいろいろあったが、困ったのは、この国では、

土曜日は半日で、日曜日は一日、店が休みになってしまうことだった。これにはその後も不由させられた。

パースに到着後一週間経ってから初めて自転車を組んでみると、致命的なことが起こっていた。後輪が引つかかかってうまく回らない。よく見るとリム（車輪）が歪んでしまっていた。飛行機で輸送時のトラブルだろう。パッキングの仕方が悪かったのだろうか。きつと、クアラルンプールで降ろしたときか何かに、雑に扱われたのであろう。ともあれ、このままでは横断どころか、ほとんどまともに走ることができない。まさか……。どの程度深刻なのだろうか。見てみたが、自分ではどうにもできそうにはないので自転車を持っていた。すると、そこには同じサイズ（650A：26×1.38）のリムはなく、取り寄せにはかなり時間がかかるそうであった。一瞬目の前が真つ暗になった。そのとき、店員の人が一応トライしてみるからと、リムに力を加えたりスポークの張りを調整したりして何とか直してくれた。そして「保証はないが、たぶんこれでシドニーまでは大丈夫だろう。」と言ってくれた。本当に助かった。その店員には、つたない英語ながらも厚くお礼を言うと、こちらの気持ちも伝わったらしく、「これが自分たちの仕事だし、こうして自転車で走る人の手助けができてうれしい。そして自転車で走ることを通じて外国の人にオーストラリアを知ってもらえることができれば幸いだ。」というようなことを言ってくれた。そして最後に握手をして別れた。

パースでは身の回りのもののほか、地図、キャンピングガス（火器）などを揃えて準備を整え、11月7日、ユースで同宿の数人に見送られてパースを出発した。これから始まる長い旅

のスタートだった。

〈今回の計画及び行程概要等〉

今回の計画は、パースからシドニーまでオーストラリアを横断するというものであった。コースとしては、パースから94号線をまっすぐ東に向かい、ノースマンで1号線に入りナラボー平原を越え、あとは1号線沿いにアデレード、メルボルンを経てシドニーに入る予定であった。また、横断後、日数に余裕があれば、ニュージールランドに行くことも当初は視野に入っていた。しかし、パースで得た情報では、①パースから南に海沿いに進めば、観光客も少なく非常にきれいなビーチがある、②ニュージールランドでは南島がきれいだが、2月に入ると寒くなる、ということだった。せつかく来たのだから、西オーストラリア州南部の、人が少なく静かな海にはどうしても行ってみたかった。しかし、仮にパースからナラボーの入り口の街ノースマンまで海沿いに行くとすると、遠回りになり、自分のペースからいってニュージールランドに渡るのには時間的にもきつい。そこで、計画を変更して①パースから1号線をそのまま海沿いに南下する、②ペースを見て無理そうであったらニュージールランドには行かず、その代わりにメルボルンからタスマニアに渡る、ことにした。

行程の概要としては、11/7にパースを立ち、1号線を南下して11/18アルバニー、11/24エス・ペランスを経て、11/29ノースマン着。12/1～12/13にかけてナラボー平原を横断（1、206km）。12/18ポートオーガスタ、12/21アデレード着。アデレードで一旦自転車を置き、エア

ーズロック等を観光。年が明けて1/12、3週間ぶりにアデレード発。再び1号線を南下し、1/24メルボルン着。1/29～2/19タスマニアを走行。2/20にメルボルンに戻り、再び1号線を北上。そして3/3、ようやくゴールのシドニーに到着した。

全体を通して振り返ってみると、ナラボーに入るまでは、体も慣れておらず、道のアップダウンもきつく、天候も不順で、精神的にも体力的にも非常に厳しい行程であった。しかし、そうしてたどり着いたエスペランスの海は、シーズン前で人が少ないためでもあったが、すばらしくきれいで非常に感動した。

ナラボーは、当初から今回の最難所と覚悟していたため、精神的にはそれほど滅入ることはなかった。ただしそれも天候に比較的恵まれた（晴れた日ばかりではなかった）という点を見落とすことはできないと思う。日差しが強い日や風の強い日はやはり体力的にはきつかった。また、ナラボーはただ厳しいだけでなく、自分が憧れた「広い広い大地を走ってみたい」という想いを満たしてくれた場所であった。その意味で、今回の旅でもっとも感動した風景はナラボーにあった。

その後、ポートオーガスタからアデレード、メルボルン、シドニーと1号線を走ったコースは、ナラボーを越えて緊張感がなくなつたせいもあつたが、それまでと比べると魅力に乏しかった。これまでに走ってきた地域に比べ、街が多く人もそれなりに住んでいるので、広く何もない大地に憧れた自分には面白味に欠けた。加えて、大都市への出入りが自転車にとってどんなに不快で苦痛であるかを思い知らされた。また、メルボルンからシドニーまではアップダウンの多い道だった。

タスマニアは2月（真夏）なのにさすがに寒かった。そして確かにきれいであつた。オーストラリアで会った人の中にはタスマニアを絶賛する人も多かつた。が、自分にはそのとき自分が求めたオーストラリアとはやはり違うなという気がした。

〈オーストラリアを走って〉

毎日走ることが生活そのものとなつている日々は、ある意味では単調とも言える。しかし、3ヶ月あまり走ると、その間には一つ一つは小さなことであるがいろいろなことがあつた。その中からいくつか挙げて、日記をもとに振り返ってみたい。

1. もっともつらかつた日（9月11日～11月22日（金））

（ペースを出発してからナラボー平原の入り口の街ノースマンまでの1500kmは厳しい行程が続いた。最初は、走り始めのためか、体が慣れていないことに自転車のメカの不調が重なり、その後はきついアップダウンと悪天候（雨）によって、そして、こうしたことが毎日続き、体力的にも精神的にも限界に来ているといふときに、次に訪れたのが暑さだった。以下、あまり内容は無いのだがその時の日記から。）

「今日はもう本当に死ぬかと思うほどつらかつた。今日の行動を一言で言うならこれに尽きる。大げさな表現ではない。今、こうしてキャラバンパーク（：キャンプ場のこと）の中に入つて

シャワーを浴びてテントの中で日記を書いていると、天国にいるような気がする。それほどつらい日だった。なぜ、そんなにつらかったのか。それは猛暑（と言つていいだろう）の中、100 km 以上こがなければならなかったこともあるが、それに加えて今日の道である。今日は最初に長い下りがあつて、それからは UP-DOWN の連続。丘越えが果てしなく100 km も続いたのだ。これにはさすがにまいった。まいったどころではない。もうへとへと。心はとりあえず平気だったが、身はボロボロだ。・・・

今日は、朝起きたときは一面に霧がかかっていたが、出発する頃には太陽がさんさんと輝いていた。出発は少し遅れて7:45 AM。やはり、テントとフライの間には蚊が20匹以上止まっていた。それで（出発の）作業はカッパ上下を着て行った。・・・

今日も最初のうちはまだ良かった。10時を過ぎると太陽もずいぶん高くなって暑くなってきた。だんだんつらくなってきて、何でもこんなことをやっているんだろかなどと思ひ出した。でも、楽勝だったらあまり意味はないんだから、つらくても仕方ない、耐えなきやと思ひながら、下ばかり向いてこいでいた。気晴らしにシドニーに着いてからのことを考えていた。・・・

こいでもこいでも丘は続いた。坂を上ったかと思うと下りが見え、それを下るとまた上り。少し長い坂を登つて、さてと前方を見ると、UP-DOWN が延々と向こうまで続いているのが見えて、ほとほと嫌になった。日はだんだんと高くなり、道は相変わらずでつらくなってきた。

・・・休憩は20 km 走るごとに1回のペースで取っていたが、平均時速が20キロも出ていないので、1時間20分ほどに1度のレストでなかなか苦しかった。

昼頃、前のレストからまだ20 km も走らずに20分ほど休憩を入れたのだが、やはりそれまでがんばりすぎたのがいけなかったのか、休憩の後、つらくてほとんど動けなくなった。しかも急に水を飲みすぎたからか、気持ちが悪くなつてしまった。やはり休憩は早め早めに取らないとまずい。レスト後の走り出しは下りだったが、下りでさえペダルを踏む足に力が入らず、下り終えて登るときにはすっかりだめになっていた。『くそーっ。負けるもんか。』思わず大声で叫んでしまった。それから大声で気合を入れながらペダルを踏んだ。なんとかその坂は登れた。でも、このときほどつらいと思つたときはなかった。《ユニケルか何かカンフル剤が欲しい・・・》なんだかんだと頭に浮かんだ。本当につらく苦しかった。脚が言うことを聞かないというよりも、暑さで体がだるくて言うことを聞かないのだった。しかも次の街まではまだあと40 km もある。それからは少しレストの回数を増やした。そして、レストを取るときは、少しでも木の陰で日影になつているところを探しては、自転車を放り投げるようにしてその日影に倒れ込むようにべつたりと座つたり、横になつたりした。のどが渴いているのだが、ある程度以上飲むと気持ち悪くなり、体が受け付けないのだった。・・・街まであと25 km、20 km と近づいてくるが、本当に自転車を動かすのがやつとで、坂などはふらふらしながら登つた。本当になんでもない平らな道が、13〜14 km しか出なかった。あと15 km のところでもレスト。《がんばれ、あと少しだ。》と自分を励ました。この頃は本当にフラフラで意識ももうろうだった。『ガンバレ、ガンバレ・・・』とかけ声をかけ、右に左にふらつきながら坂など登っていた。あと8〜9 km かなと思つてこいでいると、『街まであと10 km』の看板が出て

きて本当にがっくりした。本当に気力だけで、ふらつきながら最後まで続く UP-DOWN の丘越えを進んでいった。あと5 kmのところまで休もうかと迷ったが、ここで休んで気が抜けて緊張の糸が途切れたらもうこげなくなるかもしれないと、そのまま通過した。が、しばらくして、やはり疲れと、のどの渴きには耐えきれず、思わず道端の木陰に倒れ込んでしまった。ほんの少しだけ休んで再びこぎ出す。もう着くはずだとメーターを見ると102 km、100 kmを超えていた。もう少し、と最後の力を振りしぼって進むと『あと2 km』の標識。この2 kmほど長く感じられた距離はこれまででなかった。最後、坂を下るとようやく街の入り口が見えた。《やった。やっ」と着いた。》

今日は、特に昼のレスト以降は本当に気力だけでこいでいた。本当に本当につらかった。いくら書いても表現しきれないほど。唯一の救いは、たまに、ほんのたまに雲の陰に太陽の光が遮られたことぐらいだった。今日は『負けるもんか』と3回くらい叫んでしまったが、昼のレストの後走っている時は、つらさとどこにもぶつけようのない怒りがこみ上げてきた。《くそーっ。何でこんなにつらいんだ。》と思いつつも、その直後《でもこれは俺が自ら選択した道なんだよな》と、悲しいが納得してしまった。また、やはり暑さというのは風向きと同じように重要なファクターであることを思い知らされた。

ちなみに、この最後のレストの時に意識が朦朧としながらもセルフタイマーで写したのが、学祭の時に出した『もっともつらかった日』という題の写真である。

2. 車椅子の宮崎さんとの出会い（91年12月4日（水））

日記から

「走っているとかかなり前方にゆっくりと進む何かが見えた。最初はそれが進んでいるのか、止まっているのかもわからず、《どうしたんだろう。マルコス（前の休憩の時に会ったスイス人サイクリストで、自分より先に出ていった。）がライダーの人と道で話でもしているのかな。》と思つて近づいていくと、なんとそれは出発前にペースタイムスで読んだ、車椅子で大陸横断をしている女性とサポートの自転車の彼だった。どんどん近づいていくと彼らに間違いないことがわかり、あと5メートルまで迫ったときに『こんにちはー』と大きな声をかけた。彼らはその声にハッと驚いたように振り返り自分のことを見たが、実は彼らは僕がすぐ後ろから追ってきていることを、追い越していったライダーやサイクリストから聞いていたため知っていたらしい。彼らは初対面の僕のことを知っていたため、こちらの方が少し面食らってしまった。彼らは1016 頃ペースを出発して1日30 kmのペースで進みここまで来たらしい。彼の方は、自転車に荷物を載せたリヤカーの小さいのをつけて、自転車を手で押して歩いていた。彼女の手にはグローブが……。自分が『クリスマスはアデレードで迎えたい。』と言うと、『いいなあー』との応え。彼らはセデューナ（ナラーボアの東側の出口の街）に着くのでさえ年明けになってしまいうらしい。1日30 kmのペースなのだからそれも無理はない。でも、今までバイクや車の人に会って、『自転車か。大変だね。』と言われたり同情（？）されたりして、自分でも《我ながら大変なことをしているな》と思っていたが、彼らに比べると自分などまだまだ楽な

方かもしれない。彼らのゆっくりながらもとでもがんばって走っている姿を見て、とても勇気づけられた気がした。彼らのゴールはシドニーで、たぶん4月過ぎのこと。これからまだ長い長い道のりだ・・・。

彼らと話しているときに、少し遠くにカンガルーが3匹見えた。こちらの方を見て、ピョンピョンと跳ねどこかへ消えてしまったが、彼曰く『今日はカンガルーがいっぱい出ていますよ』とのこと。やはり、車やバイクと自転車では同じ所を走っていても入ってくる景色は違うように、自分のように一目散に（あるいは必死に）走っているのと、このお二人のようにゆっくりと歩いているのでも、視界に入ってくるものは違ってくるものだなあと思った・・・。

その夜は彼ら（車椅子の彼女は宮崎さん、サポートの自転車の方は坂東さん）とともに夕食を食べ、いろいろな話をして楽しい時を過ごした。ちなみにその後彼らは無事シドニーに到着し、その一部の模様は『筑紫哲也ニュース23』でも放送された。

3. 地平線

今回の横断においても、人や街の少ない特に西オーストラリア州では、見渡す限りまっすぐな道というのが結構あった。こうした道を走っていて後ろから車が来ると、まずその音で遠くから車が近づいてきていることに気づく。車は自分の脇を追い抜くと、どんどん離れていき、遙か彼方で点となって道の果てへと消えていく。その道の果てでは、道と空とが一点で溶けるように同化している。そんな景色を何度も見ながら、今日の目的地にたどり着くまでに、あ

地平線（地平点）を何回越えなければならぬだろうか・・・などと考えながら走っていた。

でも、今回走った中で一カ所だけ、本当に丸く地平線が見えたところがあった。ナラボー平原中、ナラボーロードハウスの西1kmと東1.6kmは《Treeless Plain》といって木が生えておらず（正確には草や丈の低い灌木は生えているのだが）、本当に見渡す限り開けている。その時の日記にも「ずつと広がる景色を楽しみながら走っていたが、自転車を止めて立ち止まると、この360度開けた景色の中で存在しているのは自分一人で、本当にこの世に今自分しかいないような気がした。ぐるっと見渡すとどちらを向いても地平線が見えた。感動してしまった。・・・《Treeless Plain》の標識の向こうは本当に全く木が生えていなかった。すごい、感動ものだ。オーストラリア広しといえども、こういう景色はめったにお目にかかれないうらう。」とある（91年12月10日）。高いところに登って地平線が見えたということはたまにあるが、（道路は盛土によって若干高くなっているとはいえ）自分の立っている位置から、その目の高さから地平線が見えたことに非常に感動したのだった。

ちなみに以前部室の壁に貼ってあったパノラマの写真は、その時に感動したこの景色を写したものである。

4. 犬におびえた夜（92年2月29日）

サイクリストで犬の恐怖におびえたことのある人は結構いるという。自分も多分に漏れずそ

の恐怖を味わうこととなった。ゴールのシドニーまであと3日に迫った日の夜のことである。以下、次の日の日記より。

「昨日、いつものようにラジオを聞き終えてから寝る体勢に入ると、遠くの方で犬の吠える声が出て、遠くからとはいえ俺をかなり不安な気持ちにさせた。ところがそれからすぐ、その吠え声に呼応するかのように反対側のすぐ近くからも犬の吠える声が出た。俺は心臓が止まりそうになった。こともあるようにその犬は吠えながらテントのすぐ近くまで寄ってきた。しかも察するところ2匹ほど。俺は、もう寝てるどころではなくなってきた、体を起こして半身になりどうしようかどうしようかと考えた。この薄いテントを挟んですぐ向こう側には、鎖にもつながられていない犬がいるのである。額からは汗がたらたらとテントマットの上に落ちた。《このままテントのまわりに犬が集まってくるのではないか。テントを引き裂いて俺を襲うのではなからうか・・・》そんな、不安で泣き出したいほどの気分だった。まさかとは思ったが、もしテントを引き裂いて入ってきたときには犬のどこをナイフで刺そうか、とか、道まで出て車に助けを求めようかとか本気で考えた。以前読んだ自転車の本に『野犬に囲まれたら覚悟をして遺書を書くしかないだろう・・・』などと書かれていたが、そのことをふと思い出し《本当にもう冗談じゃないぜ・・・》と思った。いつもは、まだ夜は明けなくて、まだ寝ていたいなどと思うものだが、この日ばかりは一刻も早く夜が明けたくないかと思った。精神的には、もう、蚊に刺されるとかそういうことを気にしている次元ではなかった。・・・辛い無事に夜は明けた。もちろん夜中には一度もトイレには行けなかった。・・・」

この日はキャラバンパーク（どの街にも必ず一つはあるキャンプ場みたいなところ）には入らず、ブッシュキャンプをしていた。そんなときに一番怖いのは犬である。でも、この日もテントを張る前に犬が出そうにはないことを確認してからテントを張ったつもりだった。結果的には何もなく済んだのは本当に幸いだった。ブッシュキャンプでは、遠くで遠吠えがしただけでも不安な気持ちになるのに、この日の恐怖は今後も決して忘れることはないだろう。

〈自転車と探検・冒険・探検部活動・・〉

さて最後に、探検、冒険活動という点から、オーストラリアを自転車で走ったことについて考えてみたい。

今回取ったルートは、一部の区間で町と町の間で距離が長く、途中その次の町までは、本当に何も無いところもあった。しかし、基本的には、車であれば普通に走れるし、自転車でも、これまで数え切れないほど多くの人が横断しているルートである。これが、「ストックルート」（内陸部のダートコースで数百kmに渡って水、食料等補給不能なルート）であれば、車でも極めて困難なコースとなるが、自分が走ったのは、そうではなく、ほとんど全ての区間において舗装された、車も（多くはないが）普通に走る道である。

また、海外サイクリングといっても、オーストラリア一国だったため国境越えに伴う煩わしさもなかったし、先進国であることと治安の良さから、余計なことに気を遣うこともなかった。走る前はいろいろと不安が一杯だったが、実際に走ってみると、気力と体力の勝負であった。

では、このような自転車による走行は、探検活動??、いや冒険活動?と言えるのであろうか。こうした疑問に、自分自身どのように考えるか、である。

たしかに、パイオニアワークという観点から見れば、今回の走行は探検活動などではない。また、車も通る日常空間での体力勝負となれば、冒険にも当てはまらないであろう。

もともと、なぜ、自転車でオーストラリアを走ったのかといえ、ひとつは単にオーストラリアを走ってみたいという憧れがあったこと、そしてもう一つは、探検活動という点からは邪道であるが、自分自身の中で、何かひとつやり遂げたいという思いがあったからである。当時、オーストラリアの前に北海道を走ったことも含め、自分の未知なることに挑戦することによって、それを終えたあとには何か新しいことが見えてくるのではないか、と思ったのだ。だから、今回の走行はもともと自己の中での意味合いが強く、横断に成功したとしても客観的な意義は薄い、ある意味では主観的な自己満足に過ぎない。

だから、今回の走行は、探検なのか冒険なのか、あるいは何なのかという問いには、しいて言えばそれは「旅」である、というより「旅」でしかない、そう答えるのが、本当のところ、いちばんぴったりと来るのかと思う。

しかし、それでもあえて、今回の旅を探検部員としての活動と結びつけるとしたら、海外サイクリングという自己の未知なる世界に一人で踏み出したこと、そしてそこで汗を流したことをもって、自分個人としての冒険活動としたい。探検もしくは冒険をする部である探検部に籍を置くものとして、こうして冒険活動をした、それが、今回の旅と自分の探検部活動との総括

である。

〈最後に〉

この旅では大自然、大地の広さを自分の体で感じる事ができた。

「まず風の国、次にハエの国、そして最後に広い広い国。」走っていて実感したのは、「オーストラリアってどんな国?」と聞かれたら迷わずこう答えるだろうということである。この言葉が大げさではなくぴったりと来るほど、オーストラリアというところは風が強く、ハエが多く、広い国であった。

暑さ、雨、向かい風、しつこく顔にたかってくるハエ、アップダウンの多い道、重い荷物、町が少ないルート・等々、自転車で走るには苦勞の方が多かった。しかし、だからこそ、車なら通り過ぎてしまうような何気ない景色に、ものすごく感動できた。いろいろな人と会い、話をし、親切にさせていただいた。自分のほかに、同じような状況でがんばっている多くの人と出会った。

この国を自転車で走れたということは、今回の旅が、探検や冒険なのかということ抜きにしても、やはり貴重で充実した体験だったと思う。

(一九九九年記)